



「核」と「人権」を考える—肥田舜太郎医師の言葉から

広島、長崎に原爆が投下されてから67年目の夏を迎えた。想像を絶する原爆の被害を受けた日本。その後の核兵器廃絶運動（原水禁運動を含む）と被害者救済の取り組みは長い歴史と実績を持ちながら、今なお未解決の問題に取り組む。

そして、2011年3月の福島第一原発事故は、日本社会に原爆とは違うかたちの放射線被害をもたらし、それは今も続いている。この事故によって、「安全神話」の目くらましにより、その危険性を実感してこなかった私たちは、やっとこの目に見えない放射線とどう対峙しなければならないのかを考え、行動せざるを得なくなった。あの事故発生から1年半以上が経過し、脱原発の世論はかつてないものとなってきている。しかし肝心なのは、これから。近い将来、核兵器も原発もない社会を作るための基軸となる考えは何だろうか。

そのことを教えてくれる人物。それが自身も広島で被爆し、放射性物質が人体に及ぼす影響を自らの体験と医療活動を通じて95歳の今も精力的に発言する肥田舜太郎医師だ。

1. 人類史を変えた無差別大量殺戮を生む非人道兵器の出現

1945年8月6日午前8時15分、広島



▷肥田舜太郎医師

に人類初の原子爆弾がアメリカ軍によって投下された。

爆心地から500メートル以内での被爆者では、即死および即日死の死亡率が約90パーセントを越え、500メートルから1キロメートル以内での被爆者では、即死および即日死の死亡率が約60から70パーセントに及んだとされる。さらに生き残った者も7日目までに約半数が死亡、次の7日間でさらに25パーセントが死亡していった。1945（昭和20）年の8月から12月の間の被爆死亡者は、9万人ないし12万人と推定されている。

亡くなった方の数は直接被爆者の推計でその後の入市被爆（多くは内部被曝）などによる死者の数は入っていないが、この数だけでも、それまでの兵器と決定的に違い瞬時に無差別大量殺戮を生む非人道的兵器

だったことがわかる。

そして人類はこの日から、大量の放射性物質を生み出す非人道的な「存在」とたたかわざるを得なくなったのである。

2. 肥田舜太郎医師を動かすもの

肥田舜太郎医師は、1945年8月には広島市の中心部にあった陸軍病院に勤務していた。8月6日の早朝（午前2時頃）、中心部から6キロ離れた戸坂村（現在は広島市東区）に急患の子ども診療のために向いた。翌6日の朝が、辞令交付の予定で朝には陸軍病院に戻らなければならなかったが、深夜治療のため寝過ごし、午前8時に目が覚めたという。そしてすぐ子どもに注射を打つための準備した時が、運命の午前8時15分だった。

肥田医師の放射線とのたたかいはその瞬間から始まった。自身も被爆したにもかかわらず、直後から数多くの直接被爆の被害者の治療にかかわり、目の前で亡くなっていく多くの人を看取った。特に火傷ではなく、被爆後5日目以降から原因がわからないままに亡くなっていく人。手の施しようもない状況の無念さ。医師としての絶望を味わった。しかしその究極の状況のなかで「原爆に負けて殺されるのは嫌だ。俺は生き延びてやる」と決意する。その決意が95歳になった今も原爆被害者に対する医療活動を続け、原爆事故後も精神的に「内部被曝」問題を訴え、生きることの尊さを語り続けることの源になっているのではないか。

3. 原爆と原発は同根である

今、原爆と原発について、肥田医師はこう語る。

「放射性物質が原料で、これがなかったらどっちもできないわけです。こっちはできるけれども、こっちはできないというも

のではなくて、どっちも同じもので成り立っている。使い方が、核兵器は直接人殺し、原発は電気を起こすので、平和利用だと勝手に名前をつけているだけ。電気を起こしながら気づかれないように人を殺しているんだから。殺されているほうは隠して言わないだけの話で、実際、中で働いている労働者はバッチを付けて、それが一定に汚れてくると、あなたは「クビ」、これ以上いたら中で肺がんになるのがわかっているから、うちへ帰って肺がんになってくれと言って帰されるわけだ。」

私たちは、肥田医師が言う「当たり前の事実」を正面から見ていなかったのかもしれない。原爆の被害の非人道的性に怒りも持つ一方で、多くが日常的には「平和利用」には無感覚だった。

4. 人権から出発すること

「考えてみたら、放射線とたたかうことは人権の話なんです。おまえというのは世界中でたった一人なんだ。その命はおまえが必死に守らなければ誰も守ってくれないよという話から、人間の命を守るのは自分しかいない。その自分がどう生きるかという生き方を自分で決めて、責任もって生きるという考えにさせることが放射線とたたかうことだというふうに僕はいつの間にか思うようになった。」

多くの人々が被害を受ける。そこでもっとも重要なことは、その規模がどうかということではない。まず「たくさんの人束」ではなく「代わることでできない一人ひとりの人間」がたくさん被害を受けているのだ、ととらえる視点だ。核兵器や原発に立ち向かうためには、その一人ひとりの命、言い換えれば「人権」から出発することが大切だ、と肥田医師は言っている。

そのことを突き詰めることなしに、核兵

器や原発もない、かけがいのない一人ひとり
りを大切にする社会を作ることはできない
のではないだろうか。

※今回は現在、書籍にすることを予定して
いる肥田医師の聞き取り内容から、その一
部を紹介しました。肥田医師について、

もっと知りたい方は多くの著書の中で、特
に『広島が消えた日——被爆軍医の証言』
(影書房、増補新版)、『ヒロシマを生き
のびて——被爆医師の戦後史』(あけび書
房)、『ヒロシマ・ナガサキから世界へ』
(あけび書房)などをぜひ読んで下さい。

(串)

【法学館憲法研究所報 第7号】刊行!!

2012年6月9日に行われた、「『金大中図書館』に行ってみよう」
(HuRP 出版) 刊行記念イベントでの講演録などを収録。

伊藤真氏の韓国訪問記も掲載されています。

◀目次▶

巻頭言 浦部法穂

〈第9回公開研究会「現代の諸問題と憲法」〉

[講演] 消費税と憲法—応能負担原則を問いつす 浦野広明

〈講演会:「金大中氏の功績と『金大中図書館』」(2012年6月9日)〉

[講演] 「指導者金大中の苦難と栄光」韓 勝憲

[講演] 「金大中大統領と金大中図書館」金 聖在

〈韓国訪問記～日韓の情報関連法制度の現状と今後の両国の関係〉 伊藤 真

〈論考〉原子力発電と日本国憲法 飯島滋明

〈論考〉衆議院の比例定数削減を考える 山口真美



新聞で紹介されました: 「『金大中図書館』に行ってみよう」刊行記念講演会

◆朝日新聞 2012.6.29 夕刊 ——韓国の軍事政権時代に民主化運動の活動家を弁護、自らも
投獄された弁護士の韓勝憲さんが来日、都内の集会で尊敬する同志だった故金大中元大統領の生
涯を語った。>>>「正義の戦いを挑んで迫害された先生は、命の危険を顧みず、信念を決して曲
げなかった」という韓先生の言葉を掲載した上で、「『金大中図書館』に行ってみよう」をガイ
ドブックとし、多くの人に訪問してほしいとの韓先生の言葉で締めくくっています。

◆毎日新聞 2012.7.30 夕刊 ——韓国のもと大統領で09年に死去した金大中氏と民主化運動
をテーマにした講演会がこのほど東京で開かれた。>>> 軍事独裁
政権時代に金氏の弁護人を務め、大統領就任後も金政権を支えた
韓先生が「苦難と栄光の両極を経験した世紀の政治家」であり、
「妥協と折衝を否定せず、民主的な意思形成を重視した」金氏を
語った内容を伝えています。記事では金氏の救援活動に尽力した
弁護士・中平健吉先生と韓先生の写真を掲載。HuRPが編集した
ブックレット刊行記念との紹介も文末に一言載りました。



△韓氏(左)と中平氏

オノQの今月の一曲

"Fast Car"

(1988, Tracy Chapman)



トレイシー・チャプマン

[最終回] 現実を切り取る音楽

トレイシー・チャプマンは、人種問題や貧困などを題材にしたメッセージソングを歌い続けてきたアメリカ出身の女性フォークシンガーです。今回紹介する曲は、彼女のヒット曲のひとつです。少しだけ、歌詞を紹介しましょう。

「あなたは速い車を持っている。ここから出て行くプランなら考えてあるの。コンビニエンスストアで働いてきたから少しくらいのお金はあるわ。そんなに遠くなくてもいい。国境を越えれば、あなたも私も仕事が見つかって、生きる意味もみつけれらるわ。」

歌詞は「あなたは速い車を…」から始まるパラグラフが繰り返されます。"fast car"とは愛する人が持っている車のことでしょう。歌が進むにつれて分かるのは、(一人称の)彼女の父親がアル中であること、両

親が離婚し彼女は学校を辞めて働いていること。そんな中、パートナーとのドライブだけがやすらぎの瞬間で、2人で生きていく希望が語られていきます。しかし、次第に彼も父と同様に酒に溺れるようになり、彼女から希望はなくなります。最後には、彼に対して「今夜去るのか、こんなままで暮らしていくのか、もう決めて」と迫り、曲は終わります。ドライブだけが現実からの解放だった刹那的な幸せの記憶と、直面する現実のコントラストがなんとも切ない曲です。

アルコール依存や家庭問題など、トレイシーが切り取るシーンはリアリティがあります。曲というものは創造されるものですが、そこからある種の現実を知らしめる力も、音楽にはあるのだと気づかされます。

[編集後記] ▶この8月号から新しく編集長を引き継ぎました、望と申します。HuRP主催イベントや人権・平和関連の記事はもとより、これから新たな企画も交え、充実した誌面をつくっていききたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。▷戦後67年の夏。猛暑は衰えず、原発再稼働、オスプレイ導入、韓国との竹島(独島・トクト)問題など政治の混迷も続くが、ロンドン五輪で盛り上がり華やかなニュースも多く伝えられた。報道写真展を観に行き(やはりと言うべきか、東日本大震災の写真展示が印象に残った)、世界中で起こる出来事の数々その一端を写真でかいま見ながら自分の想像力の限界を感じつつも、シリア紛争下で犠牲となった日本人記者しかり、伝えようとする人の想いはそれぞれ深いと思った。そして何より、肥田舜太郎先生の、自分の信念を社会に伝え続ける強い意志に感嘆するばかりだ。(望)



特定非営利活動法人 人権・平和国際情報センター Human Rights and Peace Information Center Japan

〒171-0014 東京都豊島区池袋2-17-8 丸十ビル402号 TEL & FAX 03-6914-0085

E-mail : hurp@hurp.info URL : <http://www.hurp.info/>